

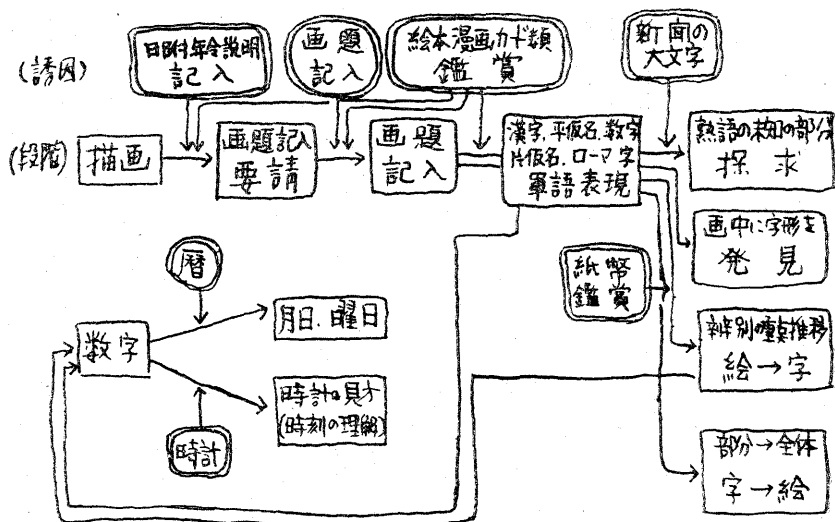
最も合理的な幼児の進学準備教育

東京学芸大学 芦 田 昇

幼児教育が年とともに盛んになって行くことは真に喜ばしいが、それにとまって起り勝ちな教育を誤る危険は大いに警戒しなければならぬ。我が子の教育に熱心な父兄の中には自分の希望によって子供の遠い将来までも決定し、有名校に入学させようとして行き過ぎた教育を機械的に試み、尊い子供の基礎的発達を助成を誤る者がある。又これに迎合して進学準備教育を行う幼稚園もあるように聞いている。それは入学選考テストを調査し、その問題を毎日幼児に練習させて一定の成績をあげさせることに努力していると云うようなものである。未だ頗る未分化な幼児が、自然の要求やこれと密接に関連する発達上のレディネスには無頓着に、毎日例えば規格的なおはじきの勘定の仕方ばかり指導されたり、巾跳は何種以上出来なければいけないと云って連日同じ運動の競争をさせられたりして終るならば、彼等に健康な豊かな人間性の基礎的発達を期待出来るであろうか。幼児は興味を持って自然にその方へ進んで行く。従って右の様な作業でも興味を持たせればする。併しこれを強制したり

利己的な競争の興味によってつるならば円満に発達するわけはない。

幼児は興味に基づいて積極的に活動する。幼児の興味は多分に機会に規定されるから自然の生活では必ずしも理想的な進み方はしないが、生活全体の関係から差当り必要とするものを強く要求して行くのである。一般に学習の効果は適正な要求を明確に持つ時に著しい。自覚的学習の出来ない幼児の経験（自然学習）に於ても同様である。同種の興味もその深さや能力の程度によって具体的な要求及び満足つまり到達する理解の程度は違ってくるから、現在の力に余るものを幼児に課するのは無益である。幼児は自己の力相応一つの興味活動に満足すれば他へ移り又遊びそのものが変容し発達して行くものである。具体的な経過については個人個人まちまちであるが一例を図示した一男児の場合にとってみよう。彼は満四才の頃字に興味を持って描画の後に攝画的な説明の字（？）を記入するようになった。年長の子供達がこれを見て自己の「姓名」を書くことを

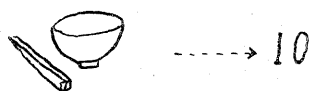


幼児の表現と理解の発達(其の一)

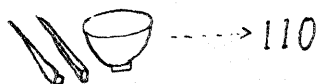
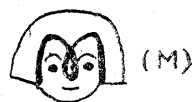
一男児の一年間(4~5才)の過程

□ ---- 発達の段階

■ ---- 誘因



-----> 10



-----> 110



-----> 101



A. 数文字の発見

B. 文字(部分)→絵(全体)

幼児の表現と理解の発達(其の二) (例)

教えたが、再生表象の変容が著しく、それを笑われているうちに字を書かなくなった。そこで第三者の干渉を除くと間もなく表の様な具合に適当な誘因に影響されて画題に關係のあるものから字を覚えて行つた。はじめは成人に描画の日附及び年齢等を記録して貰つたのが起りで自ら書くようになり、絵本其の他から多くの字を學んだ。それは成人が考えるような体系には無關係に實際に必要を感じたもの（主として漢字）から覚えて行つた。筆順は殆ど教えないから自己流であるが、複雑な字でも先ずそれらしい特徴を表わし、やがて完全に表現するようになって行つた。新聞の広告などの大きな字に既知のものがあつたとそれと熟語を作つてゐる未知の字をきいて覺えた。その間に主として絵によつて區別してゐた紙幣を次第に字で弁別するようになり、數字の知識は計算遊びとともに暦や時計に興味を發展させ、時計の見方と月日、曜日の理解へと進んだ。字は絵画として表現された線の中や、A図の茶碗と箸の關係に見るように一般日常生活の中に随時發見された。彼の字は興味活動の間に絵画の中から次第に分化しつつ生活の中に活きてゐると云つてよい。一定の文字を部分とする絵（B図参照）を描いて楽しむのもその一例であり、はじめに指導された「姓名」のような絵と異なる字と云う特別なものではないのである。

幼児が教えても直ぐに忘れてしまうのは、まだ興味が不十分だからであり、學習の適期に達していないからである。この様な時は強制すると單に反抗させるだけに終つてしまう。幼児の生活は情緒中心であるから、興味とそれに推進される現在の要求を無視して素直な發達を促進することは出来ない。

自然の要求に基いて獲得された経験は生活の文脈の中に生き、直ちに更に伸びて行く力になるだろう。然るに幼児自身の生活の中から生れたものでない外部からの強制指導の賜物は附焼刃である。

それは直ちに血が通ひ自發的な伸びる力になると云うものではない。實際の幼児の生活の必要から生れ出たものでないから、それは差当り生活とは遊離した一時的な借物に過ぎない。それはつくかどうかわからない接木のようなものである。この借物をつけるためにどれ程の犠牲が払われるであらうか。接木はつくとは限らないが、ついても元木の芽は伸びない。子供の成長發達の段階を無視した強制的鍛鍊的な指導から生れる最も大きな欠陥は情緒的反抗や無氣力又は好ましい自發性の芽の枯れてしまうことである。

發達の上の分化と綜合は又破壊と建設として考えることが出来る。分化することは既成の体制を演繹的に内から破壊することであり、綜合は分化した部分を含めて崩壊した体制を帰納的に再び建設することである。實際的には両者は同時に經驗されるとは云いながら、年齢的に重点が一方に偏ることがある。いわゆる反抗期は強烈な破壊の時期であり、反抗期を過ぎるに従つて重点は建設の方に移ると見ることができよう。幼児期はこの反抗期を含み、伸びるべく盛んに内から殻を破ろうとする旺盛な活動期である。青年期について見ても明らかであるように、反抗期の旺盛な新世界の發見と開拓の活動は強い情緒に推進される。青年にはなおかなり發達した知的な面があるが幼児の場合はそれは問題でない。経験が極めて貧しく論理的な体系を持たない幼児の活動を支配するものは此の情緒だけであると云つても過言ではない。幼児は情緒に動かされて行動す

る。興が湧けば絵を描くが気が向かなければ絶対に描きはしない。幼児の絵が上手下手に係らず生きているのは情緒が表現されるからである。

幼児を動かすものは情緒である。従って幼児を動かすためにはその情緒を動かさなければならぬ。幼児に何かさせたいと思うならば幼児が自らそれをしたとなるように仕向けなければならぬ。幼児がそれをしたくなるかどうかは幼児のレディネスによって規定されるから、教育に当っては問題の程度と適当な時期を誤らないことが大切である。

適期を待つことは自発性の尊重についても特に重視しなければならない。指導の害は自発性を無視してその芽生えをつみ、適期を待たずに無駄骨を折らせ、とどのつまりは反抗児やただおとなしい子又は教えられたことだけ覚えている子及び劣等感に圧倒された無能な子を作る処に極まる。

幼児を動かす力は情緒にあるのだから、幼児の教育は此の情緒の

幼稚園児の生活実態についての一調査（第一報告）

愛育研究所 竹 田 俊 雄

目的 この調査は幼稚園児の夏期休暇中の生活を明らかにしようとするもので、もろもろの生活習慣等がどのような形態をなしてい

るかを研究する。

方法 東京都内山手の某幼稚園児（五才児および四才児）を対象

操作によるべきである。従ってその方法は誘導につきると云ってよい。仮に進学の準備教育をするとしても誘導の可能な範囲内に止めるべきである。勿論放任されていても所期の準備教育の内容程度のことばやっけてのける幼児もあるが、親が希望するからと云って気のない幼児に課業として指導するならば個人の発達の大切な土台を作る可き時に発達の法則に逆って誤った生活を強いるのであるから将来取り返しのつかない人格性毀損の訴を犯すことになるだろう。幼児に対する教育的意図は幼児が生活の間に自発的な遊びとして経験するように誘導するべきであり、真に幼児の幸福を祈り円満な発達を願うならば彼等に課業を用意するのではなく豊かな遊びの世界を造ってやるべきである。

幼稚園は第一に幼児の花園としての使命を持つものであり、決して保護者の個人的名譽心のために存するものではない。このわかりきったことをわれわれは忘れてはならない。